

「ようだ」の意味をめぐって

— 様態、推量、伝聞、婉曲を中心に —

丹 保 健 一

On the Meaning of “youda”

Ken-ichi TANBO

要 旨

ヨウダが表すとされる「様態」「推量」「伝聞」「婉曲」の意味について考察し、「様態」的なものと「推量」的なものの比重が「時間的空間的心理的」遠近によっていること、「伝聞」に擬似的なものがあること、「婉曲」と呼ばれるものに推量的なものが混在していること等についての指摘をした。

キーワード

ようだ、様態、推量、伝聞、婉曲

1. はじめに

これまでの研究において、「ヨウダ」の意味に対してはその捉え方は一様ではない。本稿では、これまでの研究において「ヨウダ」の意味とされてきた「様態」、「推量」、「伝聞」、「婉曲」の各意味用法を検討する中で、それらの意味の本質に迫りたい。^(注1)

なお、「比況」とされている「ヨウダ」、主文末以外に位置する「ヨウダ」は対象としない。^(注2)

2. 「様態」と「推量」

2-1 これまでの研究

「ヨウダ」の意味を永野(1969)は次のように分けている。(用例は、「様態」「推量」「婉曲」を含むと思われる(5)の「不確かなまま、遠まわしに断定する」以外は省略する。)

- (1) ある事物の性質や状態が、ほかの事物に似ているということを表わす。比喻・たとえや、そう見えるというような意味に使われることが多い。
- (2) 内容を指示することを表わす。すなわち、一致とか帰着といった関係に立つものである。
- (3) 目的を表わす。「……するようにする」という形で用いられる。
- (4) 例示の意味を表わす。すなわち、ある事物がほかの事物に関する例であるような関係に立つわけである。
- (5) 不確かなまま、遠まわしに断定する意味を表わす。

最も盛んに行なわれたのは、明治年間のことのようなのである。
思いなしか、彼女のひとみは、きらきらとぬれているようだった。
どこかで君に会ったようだね。
おれには、君の気持ちがよくわかるような気がする。
君が行くようなら、この荷物を届けてもらおうか。

- (6) 願い・希望の気持ちを表わす。この場合、「……するように。」という形で言い切るか、または、願望や希望の意味を含む動詞をもって来るか、どちらかの形式にする。
(7) 軽い命令を表わす。この場合、「……するように。」という言い切りの形による慣用句と考えるべきである。固定した文型として考えると、「ように」という終助詞相当のものと扱うことも可能であろう。

森田（1980）では「ヨウダ」の意味を次のように大別し、「不確かな断定」の中に「様態」「推量」を含めている。

I. Bの説明としてAを引き合いに出す場合

- (1) 比況の言い方「AのようなB」
(2) 例示の言い方「Aのように……なB/Aのような…のB」
「たとえば…のように／ような」などの形で、話題として提示する言い方。

II. Bの具体的説明として、その内容Aを示す場合

- (1) 内容説明として示すA「AのようにBは…/BはAのようである」
(2) 帰結として予想されるA状態を出す「Aのような……になる/Aするように……する」

III. BがA状態にあることを感知する言い方

- (1) 不確かな断定「BはAのようだ」
(2) 婉曲「Aのようです」

そして、「III BがA状態にあることを感知する言い方（1）不確かな断定」を次のように説明し、「推量」を「ただの客観的推量ではなくて、本来はイコールではないかもしれない事物・事態に対して、話し手は感覚的にBがAであるふうに感じ取っている意識である」としている。

「BはAのようだ」「どうも風邪をひいたようだ。頭が重い」「どこかで見たような顔」「どうやら台風は日本上陸のコースからはずれたようです」「変だな。特にこれといった原因はないようだが」「あの店はあまりはやっていないようだ」「心なしか彼の膝がちょっと動いたように思われた」「いくら言っても聞かせても効果がないようなら、またご相談にいらっしやい」「頭が軽くなったようで気持ちがいい」と言うとき、実際は軽くなどなっていないのかもしれないが、“まるで軽くなったかのように思われる”比況意識である。しかし、真実のほどはともかく、当人が感覚的に“頭が軽くなった”と感じているとすれば、事実と感覚とが歩み寄って一致に近い状態となっているわけである。事実が完全に感覚どおりの状態かどうかは未定だが、感じとしては、恐らく事実は感覚

どおりであろうという“不確かな断定”となる。比況と不確かな断定とは、発想の基本は一つであって、ただ当人の意識の在り方にかかっている。「ヨウダ」が「BはAのようだ」という比況的気分を内に含んでいるということは、ただの客観的推量ではなくて、本来はイコールではないかもしれない事物・事態に対して、話し手は感覚的にBがAであるふうを感じ取っている意識である。

森田(1988)では、「このような不確かな断定は見方を変えれば推量とも取れる」とも指摘している。

「ヨウダ」の意味に「推量」を立てることを明確に否定する立場に田野村(1991)がある。田野村(1991)は次のように述べ、「推量」的意味が「様態」の一つであることを主張している。

「ようだ」は、基本的に、外見や印象がどのようなかを表現するものであって、ある根拠に基づいた事実の推定を表現するものではない。このことから考えて当然のことであるが、根拠—推定、推定—根拠といった構成にはなっていない用例が多い。外見や印象を、言わば単刀直入に表現するだけである。(田野村 1991)

上の(37)～(39)に見るような思考的な面が強まり、得られた情報に基づいて事実を推定するという話し手の意識を伴う場合には、「らしい」に近い用法となる。—中略—このように、「ようだ」は「らしい」の領域に重なってはいく。—中略—しかし、「ようだ」が「らしい」と同じように使われることがあるにしても、それはあくまでも、外見や印象を表すという「ようだ」の基本的な働きの一つの現れ方に過ぎないものと思われる。

2-2 分析

田野村(1991)も「基本的な働きの一つの現れ方」として「推量」的意味を認めているように、意味の位置づけは別として「ヨウダ」には、「推量」的な意味があることは否めない。例えば、次の(1)(2)を比較すると(1)はより「様態」の意味らしく、(2)はより「推量」の意味らしく感じるだろう。

(1)「雨が降っているようだ」(出典を示さない場合は総て作例である。以下同)

(2)(手をつっ込んでみて、布団がまだ温かいのを感じて)

「奴ハ、ドウヤラツイ今シガタマデココデ寝テイタヨウダ」(仁田(1992)より)

「様態」と感じるか「推量(推定)」と感じるかの違いは、「(得られた情報に基づいて事実を)推定するという話し手の意識」が無いのか有るのかによっている。推定していると感じるほど推量性が高いと判断するであろう。そして、その違いは、一般的に両者(根拠と対象)の時間的空間的心理的な距離の遠近によって生ずると考えらる。

「様態」について言えば、根拠が現場性を持ち、対象が現場性を持つことが、「様態」らしさを維持する条件となろう。逆に言えば、やや漠然とした表現ではあるが、命題とな

る事態が現場から遠ざかれば遠ざかるほど、つまり時間的空間的心理的距離が離れば離れるほど「推量」性が高くなるともいえる。

「様態」「推量」の別は、現場性に依存するところが大きいとしたが、同じ文であっても、捉え方（焦点の当て方）によって、より「様態」的になったり、より「推量」的となったりすることがある。

例えば、次の(3)において、部屋の中において、「部屋」（現場に存在）について述べれば、「様態」的意味が強くなり、「彼」（現場に非存在）について述べれば、「推量」的意味が強くなる。

(3) (部屋に入って、部屋の様子から) 彼は学校へ行ったようだ。

(根拠：現場 対象(彼)：非現場性) → 「推量」

(根拠：現場 対象(部屋)：現場性) → 「様態」

さらに言えば、同じような状況であってすら、より「様態」的であったり、より「推量」的であったりするのである。例えば、次の文の状況として、雨であることを瞬時に不確かながら判断する場合と、色々考えたのちに判断している場合とでは微妙であるが違いが出てこよう。

(4) 雨が降っているようだ。

先に、意識の違いを生じさせているのは、判断の根拠と判断の対象との時間的空間的心理的距離であるといったが、「様態」の意味となる典型的な状況としては、「そのように判断する根拠である「外形・様子・気配等」を有する本体・実体が現場に存在し、それが判断の対象となっている場合」をあげることができよう。^(注3)

もちろん「ヨウダ」の「様態」「推量」は、事態(対象)を確実に把握していないという条件の下で成立することは言うまでもないことである。

3. 伝 聞

3-1 これまでの研究

「ヨウダ」に「伝聞」を認めるか否かには、次に示すように両論ある。代表的なものをあげておく。

まず、手掛かりとなる根拠が、他者から入ってきた情報(伝達)である場合は「らしい」であって「ようだ」は使えない。(森田 1980)

もっとも、「ヨウダ」に伝聞的表現が皆無というわけではない。

(6)「私が学者から聞いた話では、地震の研究はかなり進んでいるようですが、まだ予知というところにはなかなか……」(シ・日本沈没)

などは、伝聞性の強い「ヨウダ」であろう。(仁田 1992)

- (4) さっき見た天気予報によれば、九州では大雨が降っているヨウダ／ラシイ／ソウダ。
- (5) 聞くところによると、日本人はちょんまげをしていて、紙の家に住んでいるラシイ／ソウダが、本当？(野林 1997)
- (引用者注；野林(1997)では(4)(5)を各々「伝聞1」「伝聞2」とし、「伝聞1」は、他者からの伝え聞きによる、間接的な事実認識、「伝聞2」は、単に、伝え聞いたことを提示するとしている)

直接的には「ラシイ」や「ソウダ」の「伝聞」についての説明であるが、次のような指摘にも注目したい。

伝聞的な「ラシイ」と婉曲的な「ラシイ」は、次の点で異なっている。伝聞は、第三者からの情報である、といった言表事態の仕入れ方を表すだけであって、事態成立の真偽については、判定を行っていない。事態成立への判定を行っていないからこそ、〈言表事態成立の否定化〉が成立するのである。(仁田 1992)

従属節での対話性の解除は、従属節における伝聞形式は、言表事態の仕入れ方だけを表しており、聞き手への取り次ぎを行っていない、といったことを示している。伝聞の意味特性を、①言表事態の仕入れ方と②聞き手への取り次ぎ、とに分けたのは、このことによっている。(仁田 1992)

伝聞形式では、直接言語情報をエビデンスとしてとることになる。すなわち、話し手が自ら作り出して得られる判断ないし認識を表すのではなく、言語的情報の受取り方を示すという意味になっている。つまり、伝聞では、話し手によって情報のとらえ方は示されていても、話し手による情報内容の構築はないのである(もちろん、ダイクシス基準の変更など若干の調整は行われているが)。伝聞の他者判断性は、話し手以外のところで言語化された情報をエビデンスにするという意味特性から必然的に導き出される意味ということになる。(森山 1995)

3-2 考察

ここでは、伝聞をとりあえず、「ある事柄について、自分は知らないが、他からこう伝え聞いたということを相手に知らせる言い方」(寺村 1984)であるとし、①「手掛かりとなる根拠は、他者から入ってきた情報(伝達)であり、」②「話し手による情報内容の構築はない」という性格をもつものとして進めていくことにしたい。

「他者から入ってきた情報」に注目しつつ、「ヨウダ」の伝聞であるとされている例をみることから始めよう。

- (5) 「私が学者から聞いた話では、地震の研究はかなり進んでいるようだ。」(仁田

(1992) より)

- (6) 「さっき見た天気予報によれば、九州では大雨が降っているヨウダ／ラシイ／ソウダ。」(野林 (1997) より)

上記の例文は、判断の根拠は言語的情報である。しかし、次の例文を見れば、判断の根拠が言語的情報であれば、すべて「ヨウダ」が伝聞の意味として成立するとはいえないことが分かる。

- (7) 「聞くとところによると、日本人はちょんまげをしていて、紙の家に住んでいるラシイ／ソウダ／*ヨウダ。」(野林 (1997) より)

例文 (7) の不自然さは、次のような田中 (1980) の指摘と無関係ではない。

- (11) 我々のようなものには想像もつかないが、人間の身長は 60 兆個もの細胞からできているラシイ。

- (12) 月面での引力は地球上での引力の 6 分の 1 ぐらいラシイ。

“私”のレベルで判断するのではなく事実と認めうると判断せざるをえない。この時ヨウダにはかえられない。(田中 1988)

「“私”のレベルで判断するのではなく」という指摘に注目したい。また、野林は「伝聞 1」は、「他者からの伝え聞きによる、間接的な事実認識」、「伝聞 2」は、「単に、伝え聞いたことを提示する」と「伝聞」を二つに分け、「ヨウダ」(「ヨウダ」のみではないが)の伝聞の特徴として、「話者がとらえたこと」があるとしている。「話者がとらえる」の内容を明確に示しているわけではないが、何らかの判断、推定(推定、または、情報内容の構築)に関することであろう。しかし、「ヨウダ」による「推定」、「ヨウダ」による「命題の構築」は、これまでむしろ否定されてきた考え方である。

この点に関して、(森山 1995) に次のような指摘がある。

伝聞には、一種の推測的な意味、すなわち、未知領域のことがらについて、仮に事実として認定しつつ、それを導入するという意味があることになる。(森山 1995)

上記の記述は「伝聞」一般についての指摘であろうが、つぎの例文からは、「ある事柄について、自分は知らないが、他からこう伝え聞いたということを相手に知らせる」以上のことを、話し手が何らかの意味で関与していることを感じ取ることできないだろうか。

- (8) 「私が学者から聞いた話では、地震の研究はかなり進んでいるようだ。」(仁田 (1992) より)

- (9) 「さっき見た天気予報によれば、九州では大雨が降っているヨウダ。」(野林 (1997) より)

「ようだ」の意味をめぐって

実証的判断において共通に見られる「判断」「推定」ではなく、「それ（命題）が事実であろうと判断して（推測し、納得して）受け入れる」といった意味での「推定」が関与しているように思われるのである。^(註4)

次の文のように、事実であろうと判断できないもの（判断不可能な状況で）は文として不自然なものとなる。これは、話者の判断が及ばないからであるといえよう。何らかの意味で話者の判断が働いていることの証拠とはいえないだろうか。

- (10)「聞くとところによると、日本人はちゃんまげをしていて、紙の家に住んでいる* ヨウダ。」(野林 (1997) より) (*は不自然であることを示す)

一方、判断の根拠が「他者による言語的情報」つまり、いわゆる「伝聞」であっても、話者が命題の構築に明らかに関与してと考えられる場合がある。次の文で言えば、(言語的情報である) 天気図によって (示されている内容によって)、大雨を推定している場合が前者である。

- (11)「さっき見た天気予報によれば、九州では大雨が降っているヨウダ/ラシイ/ソウダ。」(野林 (1997) より)

これらは、「自分のしらないこと」(寺村)とも「未知領域」(森山)ともいえない。その意味では「伝聞」ではない。単に、「言語的情報」が判断の根拠となっているものを「伝聞」と呼ぶ場合には、このように、話者による命題化がなされる場合となされない場合があることに留意せねばならない。これらを仮に「疑似伝聞」と「真正伝聞」と呼ぶことにしておこう。「疑似伝聞を」「伝聞」に含ませるか否かは立場によろう。

4. 婉曲をめぐって

4-1 これまでの研究

永野 (1969) は先に示したように、「ヨウダ」の意味を7つに分け、(5) 番目の意味の「不確かなまま、遠まわしに断定する」の中に「婉曲」を「様態」「推量」と共に含めている。

- (5) 不確かなまま、遠まわしに断定する意味を表わす。

最も盛んに行なわれたのは、明治年間のことのようなのである。

思いなしか、彼女のひとみは、きらきらとぬれているようだった。

どこかで君に会ったようだね。

おれには、君の気持ちがよくわかるような気がする。

君が行くようなら、この荷物を届けてもらおうか。

森田 (1980) では「婉曲」を「ヨウダ」の一つの意味として位置づけられており、婉曲についての次のような詳しい説明がある。

「雨が降ってきたようだ」と言ったとき、話し手の心は“実際に雨が降り出したかどうかは断言できないが、自身の感覚としては雨が落ちてきたと認められる”気分である。「ようだ」が、現実の状況をそれとはっきり断定せず、自身の感覚として述べる表現法であるため（事実と違っていても、それはあくまで話し手の主観的な印象だという、話し手側の責任に帰し、対象の正否とは関係ない言い方であるため）、はっきりそれと断定することのためられる事柄や、気の置ける相手への会話などで、好んで「ようだ」が用いられる。失礼を避けるための婉曲表現である。

「先生、雨が降ってきたようです」「お車が参ったようです」「先生もおいでになるようなら、私も参ります」「生活が苦しいようだったら、少額だけれどこれを使ってくれ給え」「どうだね私に似合うかね／少し色が地味なようです」「雨が降ってきましたね／ええ、降ってきたようですねえ」「試験は一週間延びたんだって／ええ、そのようです」

そのものずばり表現することより、多少あいまいさを残した言い方のほうが含みがあって上品だという考えが根底にある。「ようだ」は、自身の感覚として遠まわしに述べるところに特徴がある。

つぎのような指摘にも注目したい。^(註5)

婉曲表現の中心は「ヨウダ」である。もっとも、「ラシイ」にも、これに該当するものがないわけではない。婉曲的表現と徴候の元での推し量りとは、決して載然と分かれたれ切るものではない。分かれたれ切ることがないというより、両者は連続しているものである。(仁田 1992)

婉曲の前提について簡潔に述べているものに次のようなものがある。

「婉曲」な断定は、まさに話者にとって確実な判断が存在することを前提とし、それを不確実であるかのように表現するという二重構造を持っている。」(柏岡 1980)

婉曲表現成立の条件について触れているものに次のようなものがある。長くなるが後の議論にも関係してくるので示しておく

話し手はあることがらを承知しているのに、それを断言するのを避け、「ようだ」を用いて婉曲に表現する場合があることが知られている。次のような例がそうである。

(64) 「どうやら砂嵐は収まったようですな」と、同行者の一人は言った。(西域 (上))

(65) 列車は速度を落した。構内の線路が多くなってくる。「着いたようですな。」

(松本清張「落差」)

「砂嵐は収まった」「駅に着いた」と言い切るのを避け、そのような印象があると控え目に表現しているわけである。

このようなものは一般に「ようだ」の婉曲の用法として記述されるが、婉曲の用法とは言っても、先に述べた「ようだ」の基本的な意味に基づいた範囲でのみ可能になるものだとい

うことに注意しておくべきであろう。婉曲に表現したければ、無条件に「ようだ」が使えるというわけではないのである。例えば、「お金を貸してもらえませんか?」という依頼を婉曲に断りたいからと言って、「ちょっとだめなようです」とは言うことができない。お金を貸すかどうかは、話し手自身が決定することであって、外見や印象として受け止めるような性質のものではないからだと言えよう。(田野村 1991)

4-2 分析

「婉曲」を「話者にとって確実な判断が存在することを前提とし、それを不確実であるかのように表現する(柏岡1980)」や「話し手はあることがらを承知しているのに、それを断言するのを避け、「ようだ」を用いて婉曲に表現する(田野村 1991)」のように考えることはごく一般的な考え方であろう。また、「ヨウダ」の「婉曲」表現は、「確実な判断」の「様態」化、「推量」化によるものだということも受け入れられる考え方である。

ここでは、婉曲表現の前提として考えられている「確実な判断」(「承知している」)及び、「様態」化「推量」化に焦点をあて、「婉曲」について考えてみたい。

「確実な判断」と言った場合、話者が否定しようと思ってもできない前提・事柄(視覚聴覚触覚と言った五感によって実際に感じている事柄)とそうではない前提・事柄とがある。例えば実際感じている「痛み」や目の前に見える「事態(映像)」等は前者であろうし、確信している事柄(例えば「明日学校で講義がある」「明日学校へ行く」)であれば、後者と言うことになる。

それでは、確実な判断を常に、「ヨウダ」で婉曲に表現できるかということ、それは田野村も指摘するように「ようだ」の基本的意味によると言わざるを得ない。

例えば、自分の感覚や気持ちは、これほど否定できない確実なものはない。しかし、「(私は)痛いようだ」「(私は)うれしいようだ」は不自然である。「痛み」の判定に迷いは無く、否定できないものだからである。これは、「根拠」と「事態(命題)」が全く一致しているものであり、元々「ヨウダ」の用法が考えられないものだからである。

それでは、次のような例ではどうだろうか。

(12)「私は酔ったようだ」

(13)「風邪をひいたようだ」

上の例は、そのように感じてもそうではないことがあり得るといった「ヨウダ」が元々持っている意味成立条件に支えられて、「確実な判断」の「推定」化による婉曲表現が可能となっているのである。

目の前で起こっていないことであるが、話者が確信している(話者が承知している)場合はどうであろうか。

(14) (彼が立つ予定であることを知っている。そのため「彼は明日立ちます」と断言できる状況で)

「彼は明日立つようです」

(15) (間違いであることを確信している状況で)

「あなたの答えは間違っているヨウダ」(柏岡 1980 より)

いずれも「婉曲」は可能である。「ようだ」使用の基本的な条件である「事態成立の不確実性」があるからである。「確実な判断」の「推量」化による婉曲表現であるといえよ

う。

それでは、「話者が否定しようと思ってもできない事柄（視覚聴覚触覚と言った五感によって実際に感じている事柄）」の一つである、目の前に降っている雨を、「雨が降っているようだ」（婉曲）と言う場合にも「ヨウダ」の性質による制限を受けているのであろうか。

一見、断定できることを婉曲に表現していると思われるものであるが、しばしば出てくる用例である「雨が降ってきたようだ」、それに田野村があげている用例「どうやら砂嵐は収まったようですね」「着いたようですね」を見ると、それまでそうではなかったという共通した状況が見られる。それまで雨が降っていた場合でも、初めてそれに気づいた場合は可能であろうが、雨の中を長く歩いていて、「雨が降っているようですね」は不自然であろう。「初めて気づいた」と言うような状況が無ければ不自然である。「気づいた瞬間は、事実と感じながらも話し手にとっては確信がまだ無い」といった状況がありえよう。このような場合、場面としては、「雨が降ってきた」と断定的に表現することもできるだろうが、「雨が降ってきたようだ」が常に、「話者にとって確実な判断が存在することを前提とし、それを不確実であるかのように表現した」とはいえない。

このように、一見、「確実な判断」の「様態」又は「推量」化による婉曲表現と思われるものも、実は「様態」的意味である可能性を持っているのである。聞き手にとって、話し手が断定できる状況であると判断しても、常に「ようだ」が「婉曲」であるとは限らない。このようなまぎらわしい表現にも留意せねばならない。

以上のように、「婉曲」表現といっても、実際は複雑な様相を呈するのである。

5. おわりに^(注6)

ここまでの考察を次のようにまとめておこう。

(1) 様態と推量

様態らしさと推量らしさを分けるものは、根拠と事態との時間的空間的心理的距離である。

典型的な様態らしさとは、「そのように判断する根拠である『外形・様子・気配等』を有する本体・実体が現場に存在しそれが判断の対象となっている場合」である。

(2) 伝 聞

「伝聞」（ヨウダ）の中には「そうであろうと納得して受け入れる」といった意味の推定・推測の働きが見られる。

「他者からの言語情報」は命題構築の根拠となることもあり、推量との区別を付けにくくしていることがある。

(3) 婉 曲

事態の「気づき」といった状況においては、「ヨウダ」は一見、婉曲のように解釈されやすいが、「様態」と解するほうがよい場合がある。

【注】

- (1) 日本語のモダリティ形式が持つ意味用法を細かに分析し、構造的に記述する第一歩と考えている。
- (2) 比況（比喩）は対象としない。
- (3) しばしば、言表事態成立の否定化（打ち消し）等として、議論される「推量」には、「様態」が混在しており、それが打ち消しの可、不可の自然らしさに影響しているように思われる。
- (4) 納得・実感して受け入れるか否かが「ラシイ」との相違点であると思われるが、ここでは「ラシイ」との違いについて深く追求することは避けたい。
- (5) ラシイについての説明であるが、次のような指摘も注目したい。
「それに対して、婉曲では、事態成立は、話し手の認識の中に取り入れられ、真なるものとして握られている。ただ、「ラシイ」による婉曲では、「ヨウダ」のそれに対して、言語的情報によって、主に事態成立の真偽把握が可能になるという特徴がある。主に言語情報によっているところに、「ラシイ」における婉曲表現の伝聞への繋がりがある。「ラシイ」にあっては、徴候の元での推し量りと伝聞的表現が連続し、伝聞性を通して、婉曲表現が生ずることになる。また、伝聞性を經由することが、「ヨウダ」に較べて、婉曲表現を少なくしている。」（仁田 1992）
- (6) 「ヨウダ」「ラシイ」の使い分けの諸要因を明らかにすることから始めたのであるが、過去の研究を見ていく中で、「様態」「推量」「伝聞」「婉曲」といった意味の捉え方が研究者によって異なることが明らかになった。本稿の目的が、「様態」「推量」「伝聞」「婉曲」の意味を再検討することとなった所以である。「ヨウダ」「ラシイ」の使い分けに関する考察は別の機会に譲りたい。

【引用・参考文献一覧】

- 金田一春彦（1953）「不変化動詞の本質」（『國語國文』第二二卷二～三号）
永野 賢（1964）『古典語現代語助詞助動詞詳説』
岡村 和江（1969）「らしい」（『月刊文法』1-6）
田中 章夫（1971）「ようだ」「らしい」（『日本文法大辞典』）
吉田 金彦（1972）「ようだ」「らしい」『現代語助動詞の史的研究』
寺村 秀夫（1979）「ムードの形式と意味（1）」（『言芸言語研究』言語編第五巻）
森田 良行（1980）「～ようだ」（『基礎日本語』2）（引用は、森田良行（1989）（『基礎日本語辞典』によっている）
柏岡 珠子（1980）「ヨウダとラシイに関する一考察」（『日本語教育』41）
阪田・倉持（1980）「ようだ」「らしい」の項目（『教師用日本語ハンドブック』）
柴田 武（1982）「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」（『ことばの意味3』）
寺村 秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
長嶋 善郎（1985）「ヨウダ・ラシイについての覚え書」（『獨協大学外国語教育研究』4 獨協大学）
奥田 靖雄（1985）「おしはかり（二）」（『日本語学』1985-2月号）
森田 良行（1988）『「少し酔ったようだ」か『少し酔ったらしい』か』（『日本語の類意表現』）
田中 俊子（1988）「いわゆる推量のラシイとヨウダ」（『東北大学日本語教育研究論集』第3号）
早津恵美子（1988）「「らしい」と「ようだ」」（『日本語学』7-4）
森山 卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」（『日本語のモダリティ』くろしお出版）
益岡・田窪（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
中畠 孝幸（1990）「不確かな判断ーラシイとヨウダー」（『日本語学文学』1 三重大学）
仁田 義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
田野村忠温（1991）「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」（『言語学研究』10 京都大学）
益岡 隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
仁田 義雄（1992）「判断から発話・伝達へー伝達・婉曲の表現を中心にー」（『日本語教育』77号）
森山 卓郎（1992）「日本語における『推量』をめぐる」（『言語研究』101号）

- 金 東 郁 (1992) 「モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い」
(『日本語と日本文学』17号)
- 三宅 知宏 (1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」(『國語國文』163-11) 京都大学
- 森山 卓郎 (1995) 「伝聞考」(『京都教育大学 国文学会誌』第26号)
- 紙谷 栄治 (1995) 「助動詞「ようだ」「らしい」について」(『日本語の研究』)
- 野林 靖彦 (1997) 「『ヨウダ』と『ラシイ』—認識判断が下される状況の関連—」(『国語学研究』36号)
- 野林 靖彦 (1997) 「ヨウダ・ラシイ・ソウダが表す意味—婉曲・様態・推定・伝聞をめぐって—」
(『国語学会平成九年度秋季大会要旨集』)

【用例参照資料】

『CDROM 版 新潮文庫の100冊』新潮社 (1995)